

「第三章 貨幣資本と現実資本Ⅲ(結び)」の概要

「第三章」の抜粋

P646

「これまでに述べてきたことで最も重要なのは、収入のうち消費に向けられている部分の膨張はさしあたりは貨幣資本の蓄積として現われるということである。つまり、貨幣資本の蓄積には、産業資本の現実の蓄積とは本質的に違った一つの契機がはいるのである。」

P647

「再生産する資本家たちの一方の部分から貨幣を借りる銀行業者が、再生産する資本家たちの他方の部分にその貨幣を貸し、そこで銀行業者が福の神として現われ、それと同時に、この資本の処分権はまったく仲介者としての銀行業者の手に握られてしまうという形態」が現れる。

貨幣資本の蓄積方法と貨幣資本の過剰と貨幣資本家

P647-648

「貨幣資本の蓄積については、」このほかに、「生産要素の価格の下落」や「事業の中断」などによる「貸付可能な貨幣資本の蓄積」が行なわれる場合があり、「貨幣市場や利子率に影響を与える。」最後に、「大もうけをして再生産から引退する一群の人々によって行なわれる。」

P648

「利潤のもう一つの部分(再生産過程の拡大のための部分——青山)……が貨幣資本に転化するの、……その一つは、この部面が資本で飽和しているということである。もう一つの原因は、資本として機能できるようになる」大きさに達していないためである。

「諸生産部門の過度充満や貸付資本の過剰供給が生ずるとすれば、このような、貸付可能な貨幣資本の過多が示すものは、**資本主義的**生産の制限以外のなにものでもない。……貨幣資本そのものの過多は必ずしも過剰生産を表してはいないし、資本の充用部面の不足をさえも表してはいないのである。」

P649

「貸付資本の蓄積とは、ただ単に、貨幣が貸付可能な貨幣として沈殿するということである。この過程は、資本への現実の転化とは非常に違うものである。それは、ただ、資本に転化できる形態での貨幣の蓄積でしかない。……このような、現実の蓄積からは独立したものでありながらしかもそれに伴って現れる諸契機によって、貸付資本の蓄積が拡張されるという理由からだけでも、循環の一定の段階では絶えず貨幣資本の過多が生ぜざるをえないのである。そこで、また同時に信用の発達につれて生産過程をその資本主義的制限を乗り越えて推進することの必然性、過剰取引や過剰生産や過剰信用が発展せざるをえないのである。それと同時に、これはまた、つねに、ある反動を呼び起こすような形で起こるをえないのである。」

P649-650

「産業資本家の資本は彼自身によって、『貯蓄』されるのではなく、彼は自分の資本の大きさに比例して他人の貯蓄を自由に使うのである。……資本主義体制の最後の幻想、すなわち、資本が自分自身の労働や貯蓄の生みの子でもあるかのように思う幻想も、これで砕

かれてしまう。単に利潤が他人の労働の取得であるだけでなく、この他人の労働を動かし搾取するための資本も他人の所有物から成っているのであって、この他人の所有物を貨幣資本家が産業資本家に用だて、そのかわりに今度は前者が後者を搾取するのである。」

P651

「一見したところ貸付資本はつねに貨幣の形態で存在し、後には貨幣請求権として存在する。」

P653

「素材的富の増大につれて、貨幣資本家の階級は大きくなる。……これらの証券(利子付証券、国債証券、株式など——青山)を思惑取引する証券仲買業者が貨幣市場で主役を演ずるようになる」

利子率

P656

「利子率がかなり長い期間にわたって高いとすれば、それは、一見して明らかに、この期間をつうじて利潤率が高いということの証拠ではあるが、しかし必ずしも企業者利得の率が高いということを証明してはいない。……高い利子率は、利潤によってではなく、借入れた他人の資本そのものによって支払われることができる——それは一部は投機の時期に行なわれる——のであり」

「利潤率が高いので貨幣資本にたいする需要がふえ、したがってまた利子率が高くなる、という表現は、産業資本にたいする需要がふえ、したがってまた利子率が高い、という表現と同じではない。」資金が逼迫しているときも、産業資本にたいする資金需要がふえ、したがってまた利子率も高くなる。

P657

「労働力にたいする需要の増大につれて、可変資本にたいする需要、したがってまた貨幣資本にたいする需要も増加することはありうるのであって、これはまた利子率を高くすることができるのである。その場合には労働力の市場価格はその平均よりも高くなり、平均よりも多数の労働者が雇用され、またそれと同時に利子率も上がる。」

P659

「ある商品の供給が平均よりも減って、しかも貸付資本にたいする需要は増大するということもありうる。なぜそれが増大するかといえば、価格がもっと高くなることを見越して思惑が行なわれるからであり、また、価格を高くする最も手近な手段は、供給の一部をしばらく市場から引きあげておくことだからである。……利子率は、このように市場への商品の供給を人為的に妨げようとする試みによって、高くなることもありうる。」

P659-660

「オーヴァストーンは、貸付資本は資本一般と同じだという彼自身の仮定と抜けめなくごちゃまぜにして、そうすることによって、高利貸を唯一の資本家にし、高利貸の資本を唯一の資本にしてしまおうとするのである。」

逼迫期の貨幣資本と恐慌

P660-661

「逼迫期には、貸付資本にたいする需要は支払手段にたいする需要であって、それ以上のなにものでもなく、けっして購買手段としての貨幣にたいする需要ではない。」

「信用が収縮するかまたは止まってしまう逼迫期には、にわかに貨幣が、唯一の支払手段、価値の真の定在として、絶対的に諸商品に対立するようになる。」

P661-663

「労働の**社会的**性格が商品の**貨幣定在**として表れ、したがって現実の生産の外にある一つの**物**として現れるかぎり、貨幣恐慌は、現実の恐慌にはかかわりなく、またはその激化として、不可避である。」

恐慌に見舞われると、支払手段としての商品は投げ売りされ、「利子率は上がり、信用は解約を予告され、有価証券は下落し、外国有価証券は投げ売りされ、この減価した有価証券への投下に外国資本が引き寄せられ、最後に破産がやってきてそれが大量の債券を清算してしまう。」

P663-664

オーヴァストーンは、「利子率を規定する貨幣資本の需要供給」と「現実資本の需要供給」とは同じだと主張している。ウェゲリンは「利子率は『遊休資本の量』によって規定されているのであり、それは『ただ投下を求めている遊休資本の量の一指標でしかない』」という。

オーヴァストーンは、1844年の銀行法で逼迫の時期に銀行券の発行を抑えた。

「第三二章」の概略

貨幣資本の蓄積方法と産業資本家と貨幣資本家

「収入のうち消費に向けられている部分の膨張はさしあたりは貨幣資本の蓄積として現われる」が、貨幣資本の蓄積は、このほかに、大もうけをして再生産から引退する一群の人々の余剰資金を含む、すべての余剰資金によって行なわれる。「つまり、貨幣資本の蓄積には、産業資本の現実の蓄積とは本質的に違った一つの契機がはいるのである。」

「産業資本家の資本は彼自身によって、『貯蓄』されるのではなく、彼は自分の資本の大きさに比例して他人の貯蓄を自由に使うのである。」「資本主義体制の最後の幻想、すなわち、資本が自分自身の労働や貯蓄の生みの子でもあるかのように思う幻想も、これで砕かれてしまう。」「他人の所有物を貨幣資本家が産業資本家に用だて、そのかわりに今度は前者が後者を搾取するのである。」「再生産する資本家たちの一方の部分から貨幣を借りる銀行業者が、再生産する資本家たちの他方の部分にその貨幣を貸し、そこで銀行業者が福の神として現われ、それと同時に、この資本の処分権はまったく仲介者としての銀行業者の手に握られてしまうという形態」が現れる。

素材的富の増大につれて、貨幣資本家の階級は大きくなり、利子付証券、国債証券、株式などを思惑取引する証券仲買業者が貨幣市場で主役を演ずるようになる。「オーヴァストーンは、貸付資本は資本一般と同じだという彼自身の仮定と抜けめなくごちゃまぜにして、そうすることによって、高利貸を唯一の資本家にし、高利貸の資本を唯一の資本にしておもうとするのである。」

貨幣資本の過剰

再生産過程の拡大のための部分が貨幣資本に転化するのには、①「この部分が資本で飽和しているということ」または、②「資本として機能できるようになる」大きさに達していないためであるが、「諸生産部門の過度充満や貸付資本の過剰供給が生ずる」ような、「貸

付可能な貨幣資本の過多が示すものは、**資本主義的**生産の制限以外のなにものでもない。」
「貨幣資本そのものの過多は必ずしも過剰生産を表してはいないし、資本の充用部面の不足をさえも表してはいない」。(P648)

「現実の蓄積からは独立したものでありながらしかもそれに伴って現れる諸契機によって、貸付資本の蓄積が拡張されるという理由からだけでも、循環の一定の段階では絶えず貨幣資本の過多が生ぜざるをえない」し、「同時に信用の発達につれて生産過程をその資本主義的制限を乗り越えて推進することの必然性、過剰取引や過剰生産や過剰信用が発展せざるをえない」。「これはまた、つねに、ある反動を呼び起こすような形で起こらざるをえない」(P649)

利子率

利子率がかなり長い期間にわたって高いとすれば、それは、一見して明らかに、この期間をつうじて利潤率が高いということの証拠ではあるが、しかし必ずしも企業者利得の率が高いということを証明してはいない。高い利子率は、利潤によってではなく、投機によって、借り入れた他人の資本そのものによって支払うことができる。また、資金が逼迫しているときも、産業資本にたいする資金需要がふえて、利子率も高くなる。

「労働力にたいする需要の増大につれて、可変資本にたいする需要、したがってまた貨幣資本にたいする需要も増加することはありうるのであって、これはまた利子率を高くすることができるのである。その場合には労働力の市場価格はその平均よりも高くなり、平均よりも多数の労働者が雇用され、またそれと同時に利子率も上がる。」(P657)

「ある商品の供給が平均よりも減って、しかも貸付資本にたいする需要は増大するということもありうる。なぜそれが増大するかといえば、価格がもっと高くなることを見越して思惑が行なわれるからであり、また、価格を高くする最も手近な手段は、供給の一部をしばらく市場から引きあげておくことだからである。利子率は、このように市場への商品の供給を人為的に妨げようとする試みによって、高くなることもありうる。」(P659)

逼迫期の貨幣資本と商品と恐慌

「労働の**社会的**性格が商品の**貨幣定在**として表れ、したがって現実の生産の外にある一つの**物**として現れるかぎり、貨幣恐慌は、現実の恐慌にはかかわりなく、またはその激化として、不可避である。」

「逼迫期には、貸付資本にたいする需要は支払手段にたいする需要であって、それ以上のなにものでもなく、けっして購買手段としての貨幣にたいする需要ではない。」「信用が収縮するかまたは止まってしまう逼迫期には、にわかに貨幣が、唯一の支払手段、価値の真の定在として、絶対的に諸商品に対立するようになる。」

恐慌に見舞われると、支払手段としての商品は投げ売りされ、「利子率は上がり、信用は解約を予告され、有価証券は下落し、外国有価証券は投げ売りされ、この減価した有価証券への投下に外国資本が引き寄せられ、最後に破産がやってきてそれが大量の債券を清算してしまう。」

オーヴァーストーンの誤り

オーヴァーストーンは、「利子率を規定する貨幣資本の需要供給」と「現実資本の需要供給」とは同じだと主張し、1844年の銀行法で逼迫の時期に銀行券の発行を抑えた。ウェゲリンは「利子率は『遊休資本の量』によって規定されているのであり、それは『ただ投

下を求めている遊休資本の量の一指標でしかない』という。

「第三章」の要約と現代の私たちが留意すべき点

「第三章」の要約

「第三章」は、貨幣資本の蓄積方法と産業資本家と貨幣資本家について、貨幣資本の過剰について、利子率について、逼迫期の貨幣資本と商品と恐慌について、そして最後にオーヴァーストーンの誤りについて述べられています。

貨幣資本の蓄積方法と産業資本家と貨幣資本家

貨幣資本の蓄積は、資本主義的生産様式のもとで生じるすべての余剰資金によって行なわれ、産業資本の現実の蓄積とは本質的に違ったものである。

産業資本家の資本は、再生産する資本家たちの一方の部分から貨幣を借りる銀行業者が、再生産する資本家たちの他方の部分にその貨幣を貸し、他人の所有物を貨幣資本家が用だてることによって、それが自分自身の労働や貯蓄の生みの子でもあるかのように思わせている資本主義体制の終局の幻想を打ち砕く。福の神として現われた銀行業者が産業資本家を搾取し、この資本の処分権を握る。

素材的富の増大につれて、貨幣資本家の階級は大きくなり、利子付証券、国債証券、株式などを思惑取引する証券仲買業者が貨幣市場で主役を演ずるようになる。銀行業者の代表であるオーヴァーストーンは、貸付資本は資本一般と同じだという彼自身の仮定と抜けめなくごちゃまぜにすることによって、高利貸を唯一の資本家にし、高利貸の資本を唯一の資本にしてしまおうとする。

貨幣資本の過剰

諸生産部門の過度充満や貸付資本の過剰供給が生ずるような、貸付可能な貨幣資本の過剰が示すものは、**資本主義的**生産の制限以外のなにもものでもない。貨幣資本そのものの過剰は必ずしも過剰生産を表してはいないし、資本の充用部面の不足をさえも表してはいない。

現実の蓄積からは独立したものでありながら、しかもそれに伴って現れる諸契機によって貸付資本の蓄積が拡張されるという理由からだけでも、循環の一定の段階では絶えず貨幣資本の過剰は生ぜざるをえない。信用の発達につれて、生産過程はその資本主義的制限を乗り越えて、過剰取引や過剰生産や過剰信用を発展させ、これはまた、つねに、その反動を呼び起こす。

利子率

利子率がかなり長い期間にわたって高いとすれば、それは、必ずしも企業者利得の率が高いということを証明してはいない。資金が逼迫しているときも、産業資本にたいする資金需要がふえて、利子率も高くなる。高い利子率は、利潤によってではなく、投機によって、借り入れた他人の資本そのものによって支払うこともできる。

労働力にたいする需要の増大につれて、労働力の市場価格はその平均よりも高くなり、平均よりも多数の労働者が雇用され、したがってまた貨幣資本にたいする需要も増加し、利子率も上がる。また、ある商品の供給が平均よりも減って、しかも貸付資本にたいする需要は増大するということもありうる。価格がもっと高くなることを見越して市場への商品の供給を人為的に妨げようとする思惑から、資金需要が増大し、利子率が高くなること

もありうる。

逼迫期の貨幣資本と商品と恐慌

「労働の**社会的**性格が商品の**貨幣定在**として表れ、したがって現実の生産の外にある一つの**物**として現れるかぎり、貨幣恐慌は、現実の恐慌にはかかわりなく、またはその激化として、不可避である。」(P661-662)

逼迫期には、貸付資本にたいする需要は支払手段にたいする需要であって、それ以上のなにもものでもない。信用が収縮するかまたは止まってしまう逼迫期には、にわかに貨幣が、唯一の支払手段、価値の真の定在として、絶対的に諸商品に対立するようになる。

恐慌に見舞われると、支払手段としての商品は投げ売りされ、利子率は上がり、信用は解約を予告され、有価証券は下落し、外国有価証券は投げ売りされ、この減価した有価証券への投下に外国資本が引き寄せられ、最後に破産がやってきてそれが大量の債券を清算してしまう。

オーヴァーストーンの誤り

オーヴァーストーンは、「利子率を規定する貨幣資本の需要供給」と「現実資本の需要供給」とは同じだと主張し、1844年の銀行法で逼迫の時期に銀行券の発行を抑えた。

現代の私たちが留意すべき点

マルクスは、「労働の**社会的**性格が商品の**貨幣定在**として表れ、したがって現実の生産の外にある一つの**物**として現れるかぎり、貨幣恐慌は、現実の恐慌にはかかわりなく、またはその激化として、不可避である」と言っていますが、資本主義的生産様式は商品生産の基礎の上に成り立つことによって、あらゆるものを「商品」にし「貨幣定在」にします。そして、資本主義の発展とともに「貨幣資本」も増大していきますから、恐慌の前の繁栄期には不動産を中心とする高額な「商品」はより高額になり、庶民ですら「借り入れた他人の資本そのもの」によって資産を形成して消費を拡大し、実体経済を拡大して「繁栄期」を謳歌します。(このことについては、「第三三章」P685でも触れられています。)それが崩壊したのが「リーマン・ショック」です。不破さんは、産業循環のほんの一部にしがみついて自論を展開するのをやめて、現実を直視すべきです。

またこの「章」では、「労働力にたいする需要の増大」の効果が述べられていますが、私が「しつこく」日本経済の空洞化と「健全で「単純な」(!)常識の騎士たち」の「賃金を上げれば景気はよくなる」というグローバル資本の行動を見ない謬論を「口撃」しているのは、このことに根拠があります。そして、「日本経済の空洞化」を回復することは、労働者階級だけでなく、グローバル資本以外のすべての者にとって利益になります。